Short ショートコメント ★★★★

Playground　校庭
(Un Monde)

2021 年／ベルギー映画
配給：アルバトロス・フィルム／72 分

2025（令和 7）年 3 月 15 日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２５－３０

監督・脚本：ローラ・ワンデル
出演：マヤ・ヴァンダービーク／ガンター・デュレ／カリム・ルクルー／ローラ・ファーリンデン

みどころ

かつての「学校モノ」は思わずもらい泣きをする感動的な名作が多かったが、近時のそれはいじめ問題をテーマにした問題提起作が多い。本作はベルギー発の「学校モノ」だが、まず第 1 にカメラ目線に注目！第 2 に兄のアベルと妹のノアを学校に送り迎えするのが父親であることに注目！

いじめ問題解決のためには、秘密（保持）が大切？それとも、公開が大切？そもそも、それが難しい。アベルはなぜ妹に「このことは誰にも言うな！」と厳命したの？すると、それが破られた後のコトの展開は？

“ファイティングポーズ”を取る父親が登場し、学校側がそれに正式に対応すれば、それなりの和解も可能。そんなことは弁護士歴 50 年の私には分かりきっているが、それは真の解決なの？わずか 72 分の本作からそんな本質的な問題提起をしっかりかみしめたい。もっとも、そうだからといって“〈暴力〉と〈希望〉の爆発的な融合”との絶賛には、私は不同意だが・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作のチラシには、「静寂の中、激しく魂を揺さぶる－ベルギーの新鋭ローラ・ワンデル衝撃のデビュー作」、「あなたが観るのは、平凡な学校の〈ある風景〉」の文字が躍っている。その文字に惹かれて資料を調べると、本作は 1984 年にベルギーのブリュッセルで生まれたローラ・ワンデル監督が、鮮烈な長編デビューを飾った映画だ。第 74 回カンヌ国際映画祭に出品され、国際批評家連盟賞を受賞し、さらに第 94 回アカデミー賞国際長編映画賞ショートリストにも選出された上、海外メディアからも“完璧。ノックアウトされる”“強烈な没入感。稀に見る傑作”　“ずっと涙が止まらない。心に深く残る”“平凡な学校が、恐ろしい戦場と化す”“〈暴力〉と〈希望〉の爆発的な融合”“不快なほど力強い作品”と絶賛された作品らしい。

◆わずか 72 分の本作は、何の前触れもなくいきなり、登校日を迎えた 7 歳の女の子ノラ（マ

ヤ・ヴァンダービーク）が兄のアベル（ガンター・デュレ）に抱かれて泣きじゃくっているシーンから始まる。そこで誰もがビックリするのが、カメラの位置だ。それはノラの目線で固定されているため、2 人を見送るために来ていた父親（カリム・ルクルー）の姿は、上部が切れているし、バックに映る校庭の風景はぼやけたものになっている。身長 160 センチ以上の大人の視線ならもっと視野は広いはずだが、身長 130 センチ前後のノラの目線なら、なるほどこんな（に狭い）ものらしい。まずは、本作の撮影に込めたローラ・ワンデル監督のそんな“意思”に注目！

◆日本では『学校』(93 年)、中国では『草ぶきの学校』(99 年)（『シネマ 5』270 頁)、『思い出の夏』(01 年)（『シネマ 5』273 頁）等の感動的な「学校モノ」は昔からたくさんある。しかし、近時増えている「学校モノ」は、いじめや自殺をテーマにした問題提起作が多い。しかして、本作もスタート早々、ベルギー初の「いじめモノ」の「学校モノ」であることが分かってくるので、それに注目！

冒頭のシーンに続いては、ノラがなかなか学校に馴染めず孤立する姿が描かれるが、いじめられるのはノラではなく、兄のアベルだから要注意。小学校の校庭は広くはないから、上級生がサッカーで使っていると下級生が自由に使うことができない上、いつサッカーボールが飛び込んでくるかわからない危険もある。そんな校庭の隅っこで、ノラが目撃したのは、アベルが大柄な少年たちにいじめられている風景だ。ノラが大好きな兄を助けたいと願い、声をかけたのは当然だが、アベルの反応は「放っておいてくれ、父親にも言うな！」だったから、アレレ・・・。アベルは、なぜ、誰から、どんないじめを受けているの？そして、アベルはそれにどう対処しようとしているの？

◆私が弁護士登録をした 50 年前には、いじめ問題に関する弁護士への相談案件は全くなかったが、ここ 20 年くらいは“その手の相談”が増えている。近時の私は、そんな事件に深く首を突っ込むことは少ないが、たまに相談を聞いていても、距離感をつかみかねる案件が多い。したがって、いじめに直面している子供たちを筆頭として、それを目撃した子供たちや、その相談を聞いた教師や両親たちの対応が難しいのは当然だ。

本作を観ていても、ノラはアベルから「絶対に父親には言うな」と言われていたのだからそれを守るべき？それとも・・・？ノラはしばらくそれを守っていたが、2 度 3 度といじめを目撃すると、ついに我慢できず、ある日父親に話してしまうことに。すると父親は・・・？

そうなればコトが公になり、ある意味で余計ややこしくなるのは当然だが、そのことの功罪は？

◆ベルギー映画たる本作が邦画とは全然違うのは、アベルとノラを学校に送り迎えしてい

るのが母親ではなく、父親であること。ちなみに、本作に母親は一切姿を見せないが、それは一体なぜ？父親が妻と死別したか、離婚した上、何らかの事情で 2 人の子供を自分が引き取っているのだろうが、ローラ・ワンデル監督にとってはそれはどうでもいいことで、きっと、父親が定職につかないまま、国や政府から何らかの支援を受けながら子育てをしている設定にすることに意味があるのだろう。

本作にみるそんな父親は、ノラからアベルへのいじめの報告を聞くと、加害少年に対しても学校に対しても、かなり攻撃的な姿勢をみせるから、それに注目！いじめられた子供の父親が、そんな“ファイティングポーズ”をとると、コップ内での子供同士の争いがエスカレートし、かえって大きな争いに発展する危険があるのでは？弁護士の私はそう思ったが、本作では案の定・・・。

◆本作は 72 分と短いが、カメラ目線は始めから終わりまで低い位置に設定されているから、大人の目には違和感があるし、それが続くと疲れてくる。なぜなら、日常の視野とは異なる視野が 72 分間もずっと続くからだ。また、登場してくるストーリーが陰湿ないじめ問題だから、それが続くと疲れてくるのは当然。そして、最大の問題は、（いじめ）問題が次第に表面化し肥大化してくるにつれて、表面上の謝罪は登場しても、それは 2025 年 3 月中旬に突然浮上してきた石破茂首相による 15 名の新人議員への 10 万円の商品券配付問題への謝罪と同じように、謝罪だけで済むものではなく、ますます泥沼化していかざるを得ない問題だということだ。父親による学校側へのアピールによって、石破総理と同じように、加害少年は真摯に謝罪したが、その効果は如何に？

他方、いじめ問題の発覚時からずっとアベルの姿を見つめ、その対応に苦悩し続けてきた妹のノアの学習ぶりと成長ぶりは如何に？それを定量的にきちんと分析することができればベストだが、人間の力ではそんなことは到底無理だ。すると本作の結末は？それは、あなた自身の目でしっかりと！

◆本作のチラシには、本作の評価について、前記のとおり“完璧。ノックアウトされる”“強烈な没入感。稀に見る傑作”“ずっと涙が止まらない。心に深く残る”“平凡な学校が、恐ろしい戦場と化す”“〈暴力〉と〈希望〉の爆発的な融合”“不快なほど力強い作品”等の絶賛の言葉が躍っている。私はその評価の多くに同感だが、残念ながら“ずっと涙が止まらない。心に深く残る”には同意できない。また、“〈暴力〉と〈希望〉の爆発的な融合”についても“希望”の言葉には同意できない。なぜなら、私は「感動もの」の「学校モノ」にはずっと涙が止まらないが、本作のような「いじめモノ」の「学校モノ」では“涙が止まらない”は言い過ぎ。また、本作のどこに“希望”を見出せるのか、私には分からないから、“〈暴力〉と〈希望〉の爆発的な融合”にも不同意だ！

2025（令和 7）年 3 月 17 日記